

街灯も信号も無ければ、対向車もない。私達を乗せたタクシーは夜明け前の暗闇の中をすべるように走っていた。

昨夜は、早朝の出発に備えて早々に寝床にもぐり込んだのだが、長湯しすぎた温泉の湯あたりか、ついに亜丁に出発できる興奮のためか中々寝付くことができず、一晩中うつらうつらしてただけのような感じだった。みんなも寝起きでまだ眠かったのか、いつも快活なアーロンさえ口数も少なく、私は車に乗り込むとすぐに眠ってしまった。

と、どれだけ走った頃か、かなりのスピードで滑らかに走っていた車が突然ドライバーの急ブレーキでガクンとつんのめるようにスピードを落とし、身体が前に放り出されそうになって飛び起きた。

「ううわあぁあ～！！ な、何！？」

もう10年以上前になるが、私は当時滞在していたタイで、自分が乗っていた夜行バスの追突事故に遭遇した事があるのだ。タイ正月の休暇で故郷に帰る現地の友人に連れられて遊びに行った地方都市から、夜を徹してバンコクまで走る長距離バスに乗っていた時の事だ。おそらく運転手の居眠り運転が原因ではないかと思われたが、乗客のほとんどが寝入っていた深夜2時頃の事故だったため、とっさに受身を取ることも出来ずに座席の前部に身体を叩き付けられ顔や頭に怪我をした人が大勢いた。

急停車する車の中でその時の記憶が甦り思わず身体を硬くして身構えたが、ガガーソッ！！という衝撃は起こらずに無事に停車した車のヘッドライトに照らされて浮かびあがったのは真っ黒な水牛だ。「う、牛だあ～！」緊張が緩むとみんな声を上げて笑った。

危機一髪で生命の危険から逃れられたとも知らずに水牛のはのんびり道路を横断している。暗闇の中を結構なスピードで運転しているのを、こんな山奥の田舎では交通量が少ないから事故の危険も低いのか思っていたが、田舎には田舎の思わぬ危険が潜んでいるものだ。

助手席に座っていたアーロンが、「俺は全然気づかなかったなあ～」と感心すると「俺達は慣れているのさ。安心して任しときなよ」とドライバーは陽気に笑った。

ずいぶん走ったような気がしたが、夜は明けてこない。経度の関係で中国の四川省は日本よりかなり日の出が遅いのだ。まだ亜丁はまだ先の筈だったが、とある山の中で車が停車した。暫くすると後ろから数台の乗用車がやっ

て来る。後続車も同じように亜丁に向かう乗客をのせたタクシーだという事だった。

暗い夜道を数台の車は一列になり、何故かヘッドランプを消して月明かりだけをたよりに注意深くそろそろと走りはじめた。

やはり警察の取締りを警戒しているのだろうか。皆の話している中国語の会話がよく判らないため、どうやら私一人だけが状況を把握しておらず、何がどうなっているのかとっていると、車が停車して降りるように促された。他の車に乗っていた乗客達も車から降りている。

「え？もう着いたの？」話しかけようとする私を制して、「しっ…」とウィンが口にひとさし指を当てた。

車を降りて空を見上げると満点の星が瞬いていた。皆についてしばらく歩いていくと、前方の道路にゲートのようなものが造られているのが見えてきた。なるほど。そういうことなのか。

つまりこのゲートは亜丁自然保護区の入り口なのだ。本来なら此处で入場料の150円を支払わなければならないのだが、早朝のまだゲートが開く前に暗闇に紛れてこっそり通過してしまおうという訳だ。地元の間人は入場料を払う必要は無いので、タクシードライバー達が空の車を運転して通過するぶんには見つかって問題ないのだろう。車から降りた乗客達は道路を外れると脇の草むらの方に入っていくゲートの脇に建てられた番小屋の裏を抜き足差し足でこっそりと通過する。

中ではゲートの管理人が眠っているのだろうか？なんだか子供の頃のかくれんぼみたいだ。大の大人達が一列になり皆で息を殺して忍び足で歩いているのが可笑しくて笑いそうになるのをこらえるのが苦しかった。

無事にゲートを裏から通り抜けるのに成功した乗客たちは脇を流れる小川の縁に集まって車がやってくるのを待っていると、さっきまで真っ暗だった空がだんだん白み始めてきた。やけに早い時刻に出発するとは思っていたが、早朝出発の理由は警察の取締りを避けるためだけでなく、入場料の支払いを逃れるためでもあったのだ。この事は昨日から話題になっていたに違いないが、語学力の問題もあり、私は自分に向けられた会話以外は彼らの話を真剣に聞いていなかったため判ってなかったらしい。

タクシーのドライバー達は「俺の車に乗れば入場料は払わないでもいいようにしてやるよ」などと言って客引

きしているのだろうか。

事情はどうあれ、不謹慎だが私は大いに喜んでいて。なんと言ってもこの先まだ旅の予定は長いのだ。日本円を両替しておくのを忘れたまま四川の奥地までやってきてしまった私は、ピンチのところをギリギリの土壇場で烏里烏沙氏の友人に救ってもらったとはいえ、手持ちの中国元はこの先旅を続けるにはまだ十分とは言えなかった。節約できるにこしたことはないし、国外から遊びに来させて貰っている立場で言うのも何だが、私には中国の観光地における入場料は物価に対して法外ともいえるほど高いように思っていた。

昨日、上海小姐達と昼食を共にした時に聞いた話では、一般的な中国の会社に勤めるOLの月給は1000元から、やや高くて2000元といったところなのだそう。それが亜丁自然保護区の入場料は150元。四川省きっての観光地、九寨溝にいたっては入場料220元に加え、園内観光に必要なシャトルバスのチケット代が90元である。

勿論、その入場料が環境整備のために使われているのだという理屈は分かるが、それにしても大勢の人が訪れる自然公園の入場料が月給の10分の1以上というのはずいぶん高いのではないか。その背景には遊ぶ余裕のある奴らや外国人からは金をむしりとってやるぞという中国政府の意図が感じられるような気がして、私は少なからず憤っていたのだ。昨今、経済成長著しい中国ではあるが、一般市民にとって旅行というのはまだ贅沢な遊びの部類に入ってしまうのだろうか。

そんな事を思っている間に私達の車も無事ゲートを通り過ぎてやってきた。再び車に乗り込むといよいよ本格的に亜丁に向かって出発だ～！

夜が明けたのでようやく辺りの景色を楽しむことも出来るようになってきた。車は、生えている樹木が何故かか全て立ち枯れている景色を横に見る崖道を走っていく。見渡す限り灰色に立ち枯れ、折れた樹木の群れが朝もやに煙って幻想的な風景を造っている。まるでここは樹木の墓場みたいだ。

ああ～！！この風景覚えているよ～！！三年前に見た風景とまるで同じだ。嬉しさがこみ上げてきた。私にはその幻想的な風景がこの世とあの世をつなぐ賽の河原のようなイメージに感じられていた。ここは現世に別れを告げる死の世界。そしてここを通り過ぎると美しい天上の世界に入っていくんだあ... 我ながら感情的すぎるとは思うが、なんといっても亜丁は三年間思い焦がれて美化されてきた土地なのだ。私は暫し自分だけの世界に浸って楽

しんでいた。

「雪山が見えているよ」

しばらく走ったところでドライバーが言った。皆、ハッとして一斉に彼が指差す方向を見る。後ろを振り返ると車の窓越しに、雲間から顔を出した雪山の頂上が朝日をあびてオレンジ色に輝いているのが見えた。

「きゃー！！！！」

思わず隣に座っていたウィンと声を張り上げて抱き合った。

「あれは？」アーロンがタクシードライバーに尋ねる。

「仙乃日だ。亜丁三大神山の最高峰さ」

亜丁には真夏でも溶けない雪を頂く神の山と信仰されている三つの雪山があり、その最高峰が標高6032mの仙乃日だ。

「停めて！停めてー！！」

私達は車から飛び降りて仙乃日を眺めた。朝日に輝く雪山は神々しいほどに美しい。込み上げてくる気持ちを抑えきれずに私は再び叫び声を上げて、シャオチンと抱き合った。アーロンとウィンは夢中でカメラのシャッターを切っている。そんな私達の様子を眺めていたドライバーが笑いながら言った。

「そんなにここが好きなら、この土地の青年と結婚してここに住んだらいいさ。俺はもう結婚したが、俺の弟はまだ独身だ。よかったら紹介するぜ」

明るいとこで改めて見ると、彼はなかなかハンサムで優しそうな好青年だ。きっと弟もハンサムだろう。「紹介して！紹介して！」私が言うと皆が声を上げて笑った。

私達が騒いでいると一緒にゲートを通り過ぎた後続車もやってきて車を止め、皆車から降りてきた。先程は暗かったので気づかなかったが、その中に理糖から稻城に向かうバスの中で真っ赤なジャージを着込んでいたおじさんを見つけ「バスの中でお会いしましたね」と声をかけると、おじさんも「ああ！あんた後から乗ってきた子だね！」と満面の笑みを浮かべて二人で固い握手を交わし合った。

その場にいたみんなが、一緒にモグリで入場した共犯者の連帯感と、一緒に美しい風景を見ている連帯感で和やかなムードに包まれていた。

私が長い間思い焦がれ、何日もかけて目指してきた思い出の土地は、もう目の前まで迫ってきていた。